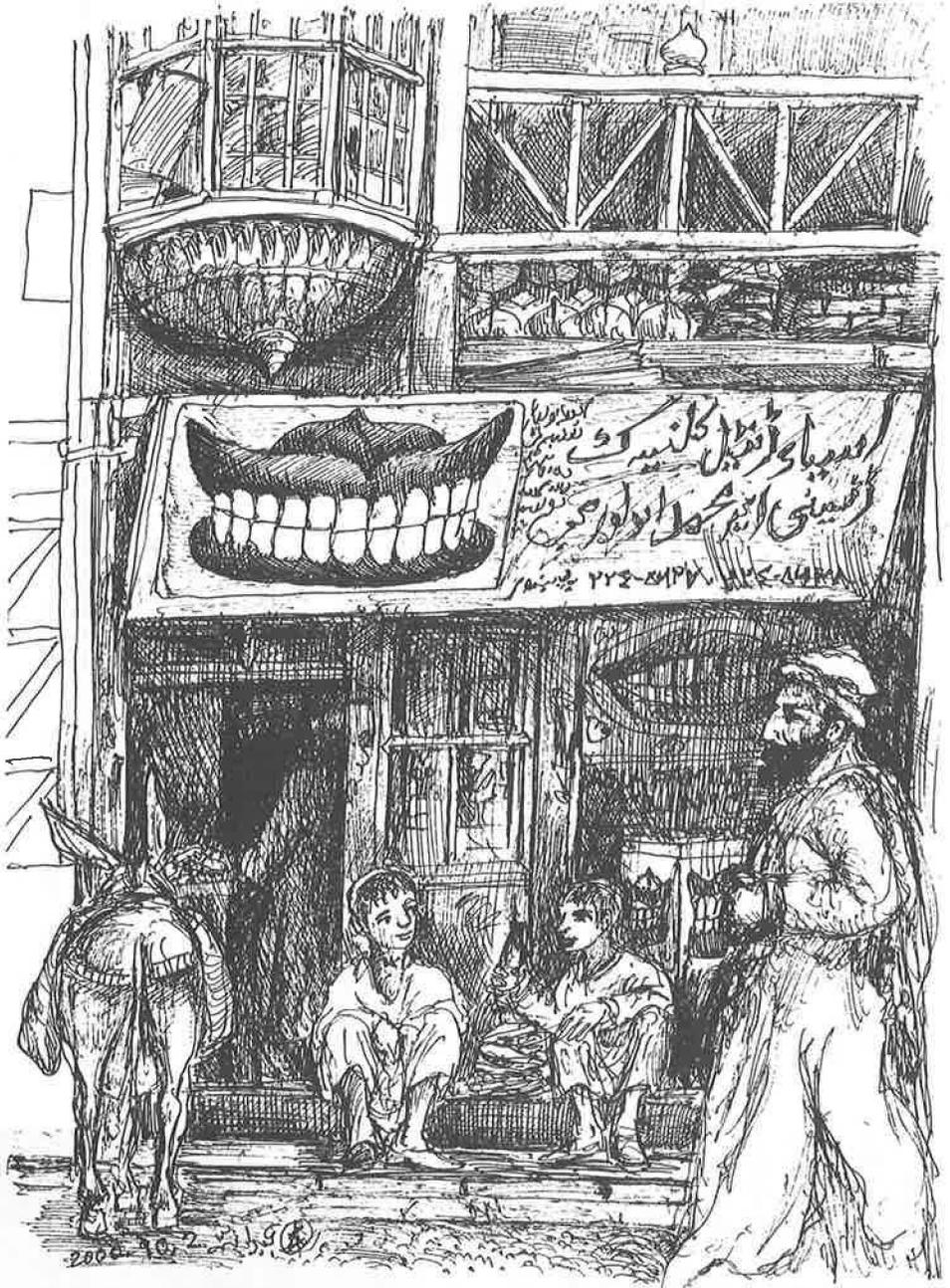


ペシャワール会報

No.65



ベ
シャ
ワール
会
大
名一
丁目
10
25
上
村第
一ビル
三〇
七号
福
岡市
中央
区
〒
810
0041
電
話
0
9
2
(
7
3
1
)
F
A
X
0
9
2
(
2
2
5
)
分
室
(
F
A
X
)
3
4
4
0
2
3
7
2
2
3
7
2

飲料水を確保し、「終末」に対峙せよ

中村 哲

国境の向こうで見たもの

藤井卓郎

私のボランティア心得

小林 晃

井戸掘りの助っ人としてやって来ました

中屋伸一

小さな^{ワール}旅 *表紙絵 甲斐大策

ベシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

———— ペシャワール会インターネット ————

ホームページ <http://www1.mesh.ne.jp/peshawat/>

電子メール peshawat@mx.mesh.ne.jp

今世紀最悪、アフガニスタン大干魃とコレラ流行に際して 飲料水を確保し、「終末」に対峙せよ

目標水源700、現在150ヶ所で着手

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）院長 中村 哲

ダラエ・ヌール

それは、現在のアフガニスタンの象徴であった。干割れた段々の土地が、昨年まで緑豊かな水田だったとは誰も思わないだろう。頭上をロケット弾がかすめる。遠くで機関銃の音がこだまする。我々は足元でさくさくと鳴る乾いた粘土質の土を踏みながら作業場に着いた。

「水の谷」ダラエ・ヌールの面影は完全になかった。そびえ立つ四千メートルのケシユマンドの山々の白雪は消え、ただ漠々と乾燥しきった熱風と、じりじりと照りつける陽光が我々を迎えてくれた。静かだ。あまりに静かなのだ。かつて子供たちが駆け回り、鍛冶屋の音、のどかな牛の声、川の流れ、井戸端会議の女たちの話し声……これから心和む人里の喧騒に代って、殺伐な弾丸の炸裂音が響くだけだ。

二〇〇〇年九月十五日、私は一月ぶりにダラエ・ヌールを訪れて、折から進行していた「飲料水確保計画」を今後どうするか、立て直しを図っていた。同年五月にやっと「PMSアフガン・プロジェクト」が再編され、無視されてきた診療所

の再建が始まったばかりだった。赤痢の大流行を目の当たりにし、問題の大きさに驚き、ダラエ・ヌールを皮切りに「水計画」がスタートしたのは、この直後、七月一日である。いわば我々の行動の火付け役がダラエ・ヌールであった。

アフガニスタン内の診療所建設（一九九二年）、マリリア大流行に対する活動（一九九三年）、そして今回が干ばつ対策である。ペシャワール会の大きなプロジェクトは、常にダラエ・ヌールを起点としてきたと言える。

七月初旬に開始された我々の計画は、「大成功」と報じられた通りだったが、これは皮肉な光景を生み出していた。七月三日、井戸掘りが始められ、十三カ所で飲料水が確保された。さらに不十分と見て、主としてアムラ村で十九カ所のカレーズ修復を始め、うち十六カ所で水を出した。そのうち「完成」と見なされた二つのカレーズは、飲料水どころか数ヘクタールの灌漑用水を確保したのである。

これは「皮肉な奇跡」と言うべきだった。九月十五日午前十一時、下流のブリアライ村から望んだとき、アムラ村が砂漠に浮かぶオアシスのごと



アフガン国内の村の井戸の修復に立ち会う中村医師

く姿を現した。つまり、作業地域以外の土地がほぼ壊滅し、PMSの介入で早めに作業が始められた所だけが生き残ったのである。我々もこの干ばつがここまで過酷なものだとは思ってなかった。

もつとも、我々の判断が甘かったというだけではない。ダラエ・ヌール渓谷の中心、カラヒシャイ村の診療所付近が八月二十日、一時的に反タリバンIIマズド勢力の手に陥ちた。八月二十二日、再びタリバン軍事勢力がこれを奪回して上流に押し返したが、以後争奪がくりかえされた。そのため、作業が著しく遅れたのである。診療所を最後

まで守っていた職員は九月一日に撤収、シエイワまで後退したが、逃れてくる難民のため宿舎が見つからず、ジャララバードの対策事務所に寝起きして周辺の巡回診療を開始させた。

カレーズ

ここで少し「カレーズ」について説明しなければならぬ。これは西アジアから中央アジアにかけて広く利用されている伝統的な灌漑方法で、数千年の歴史を持つ。簡単にいうと、山麓の地下水を水平に導き出す水路である。イランに見られるものは延々数十キロメートルに及ぶが、ダラエ・ヌールのは小規模で、長さ五〇〇mから二〇〇〇m、八〜九m毎に縦井戸を掘り、これらの井戸を横のトンネルでつなぐのである。

それぞれのカレーズには名前がついていて、ダラエ・ヌールで「バキスタン・カレーズ」というものがあつた。これは、一九四七年、バキスタンの分離独立の年に作られたことに因むのだというつまり、五十三年前のものだ。しかし、村民は長らくこのカレーズの維持を怠っていた。川の水が豊富なために、「使うまでもない」という楽観的思考があつたのと、一九七九年から一九九二年まで、アフガン戦争で住民が一時難民化して居なかつたためである。帰還後、十一年間放置されて荒れた田畑の復興に追われて、カレーズの保全に手が回らなかつたという事情もあつた。セメントを使って即席に仕上げたものは、長い目で見ると、伝統技術に劣る。実際、カレーズがこの危急時に底力を発揮したのである。

始まった流民化

難民化した村人は、主に診療所付近のカラヒシヤイ村の住民で、谷の中流域に相当する。直接のきっかけは八月二十日以降の戦火であつたが、飲料水欠乏による病気の蔓延、家畜の死亡が拍車をかけた。残つてさえいれば、PMSの協力で何とか打つ手はあつた。事実、隣のアマラ村は起死回生の努力で生き残れたのである。住民さえ居れば、我々も放つてはおかない。彼らの不在は、悪循環を生み、カレーズの修復は他村の者を動員したものの、真剣さが違う。

だが残つた村民たちは、もはや何ものも恐れなかつた。と言うより、これ以上追い詰められようがなかつたのである。九月十五日午後十二時半、しばらくの沈黙の後、再び砲声が聞こえ始めた。「ワレイコム・アツサラーム、ご挨拶だぜ。金曜日くらい休まなきや、バチが当たるぜ」

村人は黙々と作業に励み、ポンプが水を吐き出すたびに、鍋やバケツを手にした女子供が水場に群がる。中にはロバの背にポリバケツを載せた少年の姿がある。何時間も向うの村から歩いてくるそうだ。

私はただ訳もなく哀しかった。「終末……」。確かに、そう感じさせるものがあつた。ふと時計を見ると、九月十五日、アフガン時間午後十二時四十五分、私の誕生日である。五十四歳にもなつて、こんな所でウロウロしている自分は何者だ。ままよ、バカはバカなりの生き方があろうて。終わりの時こそ、人間の真価が試されるんだ……そう思

つた。

「ドクターサーブ、PMSは引き上げるんですか
い？」

「タリバンもマスードも忙しそうだな。しかしそれどころじゃない。こっちはこっちで忙しいんだ。君たちは続けられるだけ続ける」

ダラエ・ヌール出身の職員ヨセフが指揮を執っていたが、急に彼の顔がほころんだ。さらに、下流の村に十五カ所の井戸を掘るように指示すると、士気は高まつた。

蓮岡氏の奮闘——思わぬ才能

一方、ジャララバードに三週間はりつけで奮闘していた蓮岡修氏の働きは目を見張るものがあつた。人口、面積から言えば、ペシャワール会の手掛けたソルフロッド郡の惨状はダラエ・ヌールに数十倍した。「ともかく始めろ」という指示で、八月二十日に急遽、孤立無援でスタートを切らせた。九月十三日の時点で、住民を動員して掘り始めた井戸が百十三本、その数は更に増加していた。冬を前に同郡だけで最低三〇〇本を目指していた。

こうなると、かなりの組織化が必要になる。単に陳情に応じて出掛けるだけではなく、十分な調査が要る。本当に必要なかどうか、一本の井戸を何家族が利用できるか、機材の運搬方法、地元の井戸掘り職人の協力、そして職人・現場労働者一千名の組織化と管理、機材・器具の調達、他のNGOとの協力、地方政府との折衝……。それだけでも数カ月かかることを、蓮岡氏は、ごく短期間に膨大な量の仕事をこなした。

人にはどんな才能が隠されているか分からない。二十七歳の若者に任せ切りにせねばならぬ、やむを得ない個人的事情があったが、私は最初彼を見くびっていた。ともかく、三週間やれそうな所を手掛けさせ、本格的な組織化は後で自分が乗り込んでやればよいと考えていた。機材調達の遅れは致命的であったが、これは彼のせいではない。すでに稼働している筈であった組み上げポンプ二〇台は、私の到着後、やっと三台がペシャワールから送られ、使われ始めたばかりだった。

これは、現在の水位をできるだけ深く保つための窮余の策だった。六月以来、住民は自衛策で涸れた井戸を掘ったが、手掘りの場合、水が出てから掘削できるのは一・五メートルが限界である。掘っては涸れ、掘っては涸れ、水位はどんどん下がっていった。我々はグラエ・ヌールの経験から、強力な吸引ポンプを使って一時的に水を排除、その間に掘り進み、水面から十メートル前後を確保すれば、数カ月間はもつだろう、そしてその間、ボーリングを大量に準備して、次の段階に備えれば間に合うと考えていた。

実際、グラエ・ヌールで、この方法がかなりの実を上げたのである。ところが、ソルフロッド郡では、最初の段階からつまづいた。まず機材の調達が簡単でなかった。「ジャララバードの店はペシャワールから持ってくる」と聞いて、ペシャワールのバザールで捜したが満足な調達ができなかった。やっと数基を揃えたが、国境を越える時の「輸出手続き」が要る。これは面倒なもので、パキスタンの首都イスラマバードまで行って許可を

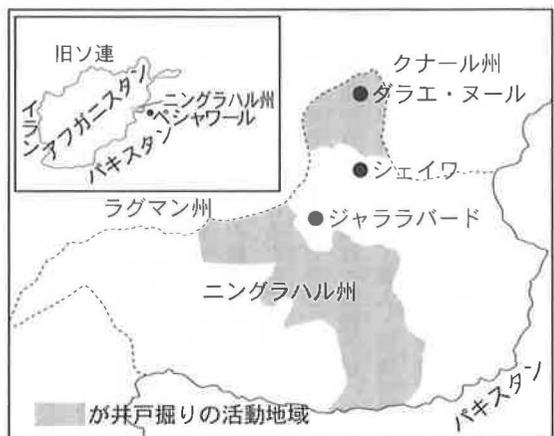
得るのに十日を要し、カイバル峠を越えてアフガンニスタンに入ると、今度は「輸入手続き」が要る。荷物が国境で留め置かれ、またそれを請け出すのに数日をかける。その頃までには、枠を外した井戸の壁面が乾燥して崩落が始まり、作業が困難になった。

第二に、事情が地形によって全く異なることであつた。例えば川沿いの場所では、排水後もの数分で水が滔々と湧き出して元の水位に復し、掘削を進める時間を与えない。別の所では砂状の地層で、掘削が可能でも井戸の底がフラスコ状に崩れ、危険である。既に二カ所で崩落して井戸が埋まり、危険と見て作業を中止、新たな井戸を近くに掘り始めた。

焦りをこらえ

最大の問題は、いったいどの深さまで確保すべきかであつた。これは誰にも分からない。例年なら最も水位の上がる八月も下がりつづけ、秋になれば普通でも下がり始める。アフガニスタンの水源の大部分は、夏に溶け出すヒンズークシ山脈の氷雪である。それが異常気象で積雪が少なくなり、特に昨年は降雪が激減、例年ならアフガニスタンの夏の光景を飾る銀白の山々は無残に茶褐色の山肌をさらしていた。洋々と流れるカーブル河とクナル河の合流点がジャララバードで、近郊に大きな橋がある。長さ約五百メートルの橋の欄干から眺めると、昨年まで渦巻く巨大な流れが、歩いて渡れるほど底をついていた。

冬の降雪を待ち、来年の春にならないと水量の



水源(井戸・カレズ)確保予定地

増加は期待できない。それまでは、さらに掘り進めない、再び涸れるのは目に見えている。

蓮岡氏は、排水ポンプの遅れに焦っていた。「短期大量」が方針だったから、無理もない。作業地をネズミ算式に拡大し、ともかく取りあえずの飲料水を確保するのが急務ではあつた。だが、いざ手を着けてみると、泥沼の戦いに引きずり込まれたようで、精神的に疲れていた。

「私の力不足で、行き届かなくてすみません」
「やるじゃないか。たいしたもんだ。ここまで組織するとは、上の上だよ」

「始めたものの、先が見えないような気がして……」

「構わずに、どんどん増やすんだ。涸ればまた

掘ればよい」

「排水ポンプの遅れで井戸壁が崩れ始めています。井戸枠を入れないと危険ですが、一旦入れると、涸れたときにまた外すのは大変ですが……。ジレンマです」

「どこまで掘ればよいのか、誰も分からないんだ。完成に一年は覚悟して、ある程度掘り進めば、まず井戸枠をおろせ」

私が冬を乗り切るための暫定案を示して「長期戦」を説くと、少し落ち着きを取り戻したようであった。排水ポンプを使って掘り進む深さは、最初水面から一〇メートルを予定していたが、調達の遅れと緊急性を計りにかけて五〜六メートルに減らした。しかし、ポンプの数がわずかに三台である上、仕事の進み具合が一日〇・五メートル〜一メートルがやっとだとわかり、更に二〜三メートルに減じた。住民はすぐに水が要る。あまりの遅れが不満を生み始めていたのである。

排水ポンプと発電機は徐々に補充される見通しがついたが、次の段階はボーリングをどう準備するかが焦点になってきた。それでも、「段階的掘削、長期作戦」が伝えられると、悲壮な緊迫感が薄れ、ゆとりを与えられて安堵した様子であった。

「風の学校」の決断

しかし、いくら我々が頑張ったとて、所詮「素人集団」である。技術面の適切な指導はやはりプロが必要だ。私が無念の気持ちで思い出したのは、井戸掘り名人、「風の学校」の主催者、故中田正一氏だった。氏はアフガン戦争中ペシャワールを

訪ねること三回、氏の活動の振出しであったアフガンスタンに情熱を傾けていた。それが数年前に逝去され、今さらながらそのかくしゃくたる容貌が生き生きと思ひ浮かび、あの世から呼び戻したい気持ちであった。

思い余って氏のご夫人、中田章子さんに連絡をとったのが九月六日であった。私の訴えに驚いた中田章子氏が、わざわざアフリカ・セネガルの仕事をとりやめ、急遽、井戸掘り経験の長い中屋伸一氏を送ることを決定した。氏がパキスタン大使館の協力でビザを得て機上の人となったのが九月十一日、この間五日である。

中屋氏はペシャワール到着後、アフガン領事館でビザを待つこと七日、間もなく現場に到着する。アフガン側の非効率で、じりじりと時間が過ぎてゆく。物資調達から人材の送り込みまで、一つ一つの何でもない仕事で、日本の何十倍もの努力と忍耐を強いられる。とはいえ、因縁だと言えば古くさく聞こえるが、中田章子氏の果敢な決断には、ただただ感謝という以外にない。

こうして、仕事は始まったばかりだが、徐々に体勢を整えつつある。私たちの電撃的な活動の開始は、現地で驚きと賞賛と感謝を以って迎えられ、多方面で友好的な協力を得ることができた。通常、政府間援助はもちろん、NGOでも調査・準備に優に半年はかかるのだという。三週間ではほぼ百二十カ所に着手したPMSの動きは、奇跡的というのに近かった。しかし、この背後に会員たちの強力な財政的支持があったことは言うまでもない。

これはPMS（ペシャワール会医療サービス）の活動の中で、或いは最後の大きな戦いとなる可能性もある。現場の士気は高い。成功の可否は、一重に財政と補給、人材にかかっている。



一九四六年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。専門II神経内科(現

地では内科・外科もこなす)。国内の診療所勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。以来十六年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、主に貧民層の診療に携る。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設、パキスタン山岳部に三つの診療所も併せ持つ。一九八六年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガン無医地区山岳部に三つの診療所を設立して、アフガン人の無料診療にもあたっている。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、辺境山岳部へも定期的に移動診療を行っている。現地スタッフ150名、日本人ワーカー5名。年間診療数約18万人。

*ワーカー通信

国境の向こうで見たもの

—— 乾いた土地に容赦ない太陽

PMS現地連絡員（会計担当）

藤井卓郎

イスラマバードへ

病院の車で何度ここを行き来したことだろう。日本からどなたかお見えになるとき、ペシャワールからイスラマバードまでの出迎えは、私か蓮岡さんの仕事である。蓮岡さんは、アフガーニスタンの早魃が深刻である為、新設された井戸掘り部隊の隊長としてこれも新設のジャラーラーバード事務所に赴任している。今日来られるのは蓮岡さんの仕事を技術面で支えるために来てくださる、井戸掘り職人の中屋さんである。

夕暮れどき、パーキスタンの北西辺境州とパンジャーブ州の境に架かるアトックの橋を通過。ここでは三つの河が合流している。インダス河、スワート河はパーキスタン北部から、そしてカーブル河はアフガーニスタンからペシャワール盆地を経てここに到る。眼下でインダス河の青い水とカーブル河の茶色い水が一つに合流し、完全に

交じり合うことも無く、かつ共に流れ合っている様が目に見える。

タージの結婚式に参加

ペシャワールから北に向かうと、市街地を抜けた辺りから緑豊かな田園風景が広がる。パーキスタンの大地は基本的に乾いていて、人の手が入っていないところは雑草も疎らな荒野である。それなのにこの地域の輝くばかりの緑は何なのか。

暫く車を走らせると、街道は何本もの河の流れに架かった橋々を、次々に通過する。河から派出した太い灌漑水路も目に入ってくる。カーブル河がハイバル峠より少し北で国境を越えてペシャワール盆地に入ってきて来て、平原を幾条にも枝分かれして通過しているのがこの地域、まさに水郷なのだ。

この水郷の真っ只中にチャールサッタの町がある。今では小さな町であるが、昔々はペシャワール以上に栄えていたらしい。

ペシャワール会医療サービスのペシャワール病院で製靴工助手として働くグラム・ハイダルの家は、チャールサッタの町から仏教遺跡のあるタフテイバーイーに少し寄った村にある。彼は元ハンセン氏病患者であったが、中村先生の治療で病を克服し、手足に後遺症は残るものの立派に社会復帰を果たした。そしてその息子のタージ・ムハンマドも私達の病院で運転手として働いている。

今日は日曜日、私は井戸掘り職人の中屋さん



カレーズの掃除をするアフガンの村民達

と共に、そのタージ・ムハンマドの結婚式に出席した。ジャラーラーバード近郊の早魃対策事業に参加していただく為に中屋さんをお呼びしたのに、アフガーニスタンのビザを待ってもう一週間もペシャワールで足止めされている。そのお詫びも兼ねての小旅行である。

パーキスタンでは運転手の給料もたかが知れている（ペシャワール会医療サービスでは現地の相場に合わせて給料体系をとっている）。一方結婚式にかなり纏まったお金がかかるのは万国共通である。

タージの結婚話は随分前からあったが、お金が

貯まらず延びていると聞いていた。最近、彼は私達の病院の夜間当直運転手勤務もこなし、当直手当を稼いで蓄えにまわしていることも、私は知っていた。努力と忍耐の果実はさぞ甘からうと思う。パークスターンの結婚式では何日かに亘って幾つかの異なった儀式が行われる。その連なりの一番外に、新郎が新婦側親類縁者と自分の親類縁者を招いて食事を供する「ワリマの儀」がある。私達はこのワリマに招かれたのだ。

水事情を見学

こういった催しの常で開始が大幅に遅れたので、中屋さんのご希望でこの村の水事情の見学に出かけた。

ここチャールサツダ近郊のアハマダバード村はスワート河・カール河の流れを利用した大規模灌漑網の一画を占め、村の中を流れる豊かな灌漑水路の水を利用し農業を営み、家畜として牛や水牛を飼う。家畜の糞は肥料として用いられるほか、円盤状に捏ねられて壁に貼りつけられ、乾くと貴重な燃料になる。農地には今(九月)、稲、砂糖黍、とうもろこし、などが目につく。

この地の米はやや日本の米に似て太めで、パークスターンに一般的なチャーハン風ではなく、汁のない「おじや」の様に炊かれる。今回、このご飯もご馳走になったが、肉や野菜のだしが効いていておいしかった。灌漑水路に沿って歩くと、途中少年達が水遊びしていた。訊いて見たところ、早魃で騒がれている今年も、去年と変わらず水は豊富に流れているとのこと。一言強調しておかな

ければならないのは、こうした灌漑水路網は人為的組織の努力により建設され、毎年農閑期一ヶ月に及ぶ水路底の土砂さらい等の保全活動により維持されていることである。

タージの家の井戸を見せてもらったところ、手掘りで深さ三から四メートルほどの単なる堅穴であり、自分達で掘ったとのこと。この村では少し掘れば何処でも水が出るので、まさに水郷だなど感じいった。井戸の水量も今年は去年より少ないということもなく、早魃の影響はこの地には及んでいない。

「なぜ殺すのか……」

タージの仕事仲間、つまりペシャワール会医療サービスの職員達十人ほども結婚式に出席していたので、チャールサツダからの帰りは一台の車に詰詰めとなった。アフガーン人職員の一人が持ってきたバシヌトー語歌謡を流しながら陽気にタージの村を出発した。

少し走ったところでテープから流れる曲が変わり、音楽に銃声が混じり始めたので、活劇映画の主題歌が何かかと訝っていると、そのアフガーン人職員が「歌詞の意味が分るか」と訊いてきた。私が「このバシヌトー語は私には難しすぎて理解できない。一体なんと歌っているんだい」と聞き返すと、パークスターン人のバシヌトウンである別の職員が一言ウルドゥー語で訳してくれた。

「なぜ殺すのか、アフガーン人よ。なぜ殺すのか」。歌詞の向こうに銃声・砲声そして男女の絶叫が混じり始める。内戦で流された夥しい血、荒廃し

た国土。アフガーン内戦の悲劇を歌った歌だったのだ。このときばかりはアフガーン人も、パークスターン人も、そして日本人も、目頭を熱くして押し黙ってしまった。

初めての国境越え

「ペシャワール」とは国境に臨む町といった意味だとは何処かで読んだことがある。ペシャワール市内西部のカールハナバザール(密輸品を多く取り扱っているとされる)の店々の連なりがおわるまえに、部族地域ハイバル自治区の最初のチェックポストがある。私は外国人だということで、自治区入域の前に地方内務局で許可を取り、自治区政務官事務所(ペシャワール新市街にある)で警官を車に同乗させての出発である。

ハイバル自治区内を峠に向かって上って行く道は、両側に豪快に聳える乾ききった山々の谷間をくねくね続いて行く。家々は皆泥作りではあるものの、まことに砦のようである。特にこの道沿いに点在する「バッテリー」と呼ばれる密輸品倉庫兼卸売り所は要塞そのものの造りである。数軒の富豪の屋敷はラーホールのシャーヒーキラー(ラーホール城)と張り合うほど大きい。

峠の上にある町ランディーコータルを少し過ぎて、ハイバル峠の最高所を越えると道は急につづら折に下がっていく。下り切った所が国境の町トールハムである。

今回、私にとっては初めてのアフガーンスターン、そして何よりも陸路で「国境」と言うものを越えた最初の体験となった。初めて「国境」と言

うものをこの目で見た。パーザールの連なりが途中、柵で仕切られている。道には門が設けられていて夜は閉ざされる。パーキスタン側のほうが建物、国境警備の警官たち、出入国管理体制など、申し訳ないが全てが比較的立派に見える。ここまでベシャワールから一時間半ほどかかった。

国境の向こうも乾いた谷あいを道は続く。アフガーニスタンに入国して以降道路の舗装が悪いのには閉口させられる。道路補修事業は始まっているようだが、爆撃されてそのままのような箇所が未だ到るところにある。徐々に谷は広くなり、やがて平原の中を真っ直ぐの道がジャラーバードに続いて行く。道がカーブル河と接近している部分では緑の農地も見当たりますが、殆ど沙漠のような中を国境から二時間くらい走ったところに、ニングラハール州の州都ジャラーバードがある。

ジャラーバードの夜は暗い。もともと豊かな電力供給があるわけではないのだから、今は水不足で水力発電の稼働率が低下し、「電気は時々しかこない」状況である。発電機のないところは夜、明かりがない。ベシャワール会医療サービスで、アフガーニスタンの井戸掘り事業の為に開いた事務所兼宿舎にも、毎晩夜通し発電機の運転音が唸りつづける。うるさいので止めたいが、九月になってもうだるこの熱帯夜を扇風機無しでは寝られたものではない。

「どつづいたら良いかわからない」

翌日は実際の井戸掘り現場を見学してまわった。

私達の井戸掘りプロジェクトが展開しているニングラハール州のスルフロード郡は私の見たところ乾ききっていた。灌漑水路からの水が届かず、半ば放棄された農地が延々とつづく中を、もうもうと砂埃の巻き揚がる黄色い道が、でこぼこしながら続いて行く。夏の終わりの太陽が、乾いた大地をさらさらから乾かす。

渴きを癒す為、私達は頻りに水を飲んだ。しかし大半の村では頼みとする井戸も枯れ果て、遠距離からもらい水をしながら、私達の井戸掘り部隊が救援に訪れるのを待っている。

蓮岡さんを中心とするジャラーバード井戸掘り部隊の働きは地域住民に希望を与えているようであるが、早魘の進行も著しい。この地の家々も皆、砦のような大きなものだが、その住人が水を求めて余所に移り済んでしまった家も多い。

私を案内してくれた井戸掘りプロジェクトの現場監督の一人が言った。

「長く続いた内戦の後はこの大旱魘だ。一つの国民の上にこう次々と災難が降りかかるようでは、もうどうしたら良いかわからない」

フアールダ

ジャラーバードでは電話もあまり普及していない。ベシャワールへの事務連絡の為、夜暗くなつてから公共電話局に電話をかけた。

ジャラーバードのパーザール(商業地区)は比較的小さく、電気が無いので夜はとても暗い。しかし、ところどころ非常に明るく輝く店があった。自動車エンジンを利用した発電機を設置して

いる店である。

電話をした帰り道、私は蛾のようにそうした店の一つに吸い込まれていった。最初は例によってコーラでも飲むつもりであった。が、店頭の台の上、水を砕いた中に埋まっているアルミニウムの大鍋が私の心を捉えた。

「フアールダ、ラーカ! (フアールダをくれ!)」

出てきた「フアールダ」はかき氷の上に牛乳から作ったシャーベットが乗ったもので、ベシャワールと同形式である。ニューデリーやイスラマバードで食べたフアールダには、氷が無くてソウメン様のものが入っていた。そうか、かき氷をベースにしているのがパシエト語地域のフアールダの共通項なのだ、と納得した。特にジャラーバードのフアールダの特徴は、パック物のマンゴースイスがかかっていることである。マンゴの穫れない国なので、マンゴースイスが夏の雰囲気を一層かき立てるのである。私はジャラーバードの美味を満喫して事務所に戻った。

井戸掘り職人の中屋さんにジザがやつと出て、ジャラーバードに向けて旅立たれた。中屋さんが私達の井戸掘り事業のぶつかっている技術的な壁を打ち破ってくださることを祈りたい。そしてこの地の人々が水の恵みに再び浴することができるよう、ベシャワールからの後方支援を強化したい。私はベシャワールで暮らしているが、心ではジャラーバードとつながっていたと思う。

私のボランテイア心得

「夢」の実現への現実的対応

PMS医師 小林 晃

アジアの混沌に惹かれて

お元気ですか。六月にベシャワールを離れ、現在日本で働いています。

現地からの情報によりますと、アフガニスタンは現在、未曾有の大干魃で井戸が次々と涸れ、農民達が続々と村を放棄し、流民化し始めているようです。ダラエ・ヌール診療所付近では赤痢が異常に流行し、母親が遠路はるばる赤子をつれ診療所に着く頃には冷たくなっていたというような光景が日常に見られると聞きました。現地ではアフガニスタン東部地域を中心に安全な飲料水確保のため、約七〇〇の井戸の確保を目標に奔走していると聞きました。現地は緊急事態で、ベシャワール会十七年の歴史の中で、最大規模の事業になるようです。

さて、私はこの緊急事態の間に、残念ながら日本で働いていましたので現地の情報をお伝えすることが出来ません。そこで今後のために、今回は現地で活動できる医師が一人でも現れるのを期待して、自身のこれまでの経験や感じたことを伝

えます。ベシャワール会の活動は今後二十年以上を見据えたものです。そのため中村医師や私以外にも、長期にわたり現地で活動する若い医師をぜひとも必要としています。

私は学生時代、アジア諸国の混沌としたところに惹かれ、何度も放浪に出かけました。いま思えばそこでの強烈な経験は、自身の人生観を変えてしまったように思います。医師国家試験後にベシャワールを訪れて中村医師に初めてお会いし、将来アジアの国々で医療活動ができればと漠然と考えるようになりました。

その後医師になり、約三ヶ月間でしたが、内視鏡の指導でベシャワールに行く機会に再び恵れました。帰国後本格的に、現地で働くことを考えて、神経内科、呼吸器科、皮膚科、そして小外科などの研修をしました。

この準備のための研修期間中に結婚し、子供が産まれました。父親になったこともあり、周囲からは猛反対され、何度も行か迷うこともありました。しかし平成九年三月より本格的に現地での活動を開始し、早いもので今年で四年目になります。

同じ「夢」でも……

実際に現地に赴き、いろいろな人の話を聞いて気付きましたが、家族が夫の夢のために欧米のよいうな先進国ならいざ知らず、未知の発展途上国に不安を抱きながらついていくこと自体が稀なようです。

私の友人で将来、海外で援助活動をやりたいと

いう人が何人かいましたが、家族の反対などなかなか行くことができないのが現状のようです。

結婚前には、将来の夢を語ると、「夢があつていいですね」と言っていた妻が、結婚して子供ができる、「あなた、何を夢みたいなこと言っているの、この子供はどうするの」と言われ、断念した友人もいました。

しかし、このような家族の反応は、決して責められるべきことではなく、世間では一般的なことなのです。他人がこのような活動を行っている、「すばらしいことですね」ということになりませんが、実際に身内が行う段になると、「何もあなたがやらなくていいのに」というのが普通の反応のようです。

私の母も、今でこそあきらめたのか「まあ、体に気をつけて行ってきなさい」と言ってくれます。しかし当初は、「幼い子供を連れて、あんな危険なところに行くとは何と非常識な」とよく言われたものです。昔の日本では、「夫の言うことに黙ってついていくのが妻の務め」ということがあったかもしれませんが、そのような女性は現在では稀なのではないでしょうか。

活動を長続きさせるためには家族の理解が不可欠です。本人の熱意だけでは家族の理解は得られません。現地では予想もしない様々なことが起きます。簡単ではありませんが、家族の立場になって根気よく話しあい、家族の不安を取り除くように努力することがまず第一です。「現地にはもつと困っている人がいる。彼らのために、我慢してついて来なさい」というような一方的な説得では



干上がった農地。至る所にこのような風景が見られる

とても理解が得られません。本人が行くことにより、ある程度の家族の犠牲を伴うことを認識してお互いが理解し合えるように努力しなければなりません。

経済的不安——誰がサポートするか？

家族にとって、経済的な不安も少なくありません。ペシャワール会のような援助活動をしていてお金のことを述べるのに「反論する方もおられると思います。しかし、活動をはじめて四年になり、家庭を持ちながらこのような活動を続けるために

はある程度の経済的な安定が重要だということが、ようやくわかってきましたので敢えて述べたいと思います。

政府からの派遣ではないペシャワール会のようなNGO（非政府組織）では、家族を養うだけの十分な給料を会から頂くわけにはもちろんいきません。そのため自分の活動をサポートしてくれる病院がないと続けることはできません。

私が以前お世話になっていた病院では、なるべく現地で長く働くことを考えて、当初は一年のうちに現地で八ヶ月間、日本で四ヶ月間働くという予定にしていました。一年に数ヶ月しか働かない割には、有難い給料を頂いていましたが、実際に活動を始めると現地や日本で思った以上に様々な経費がかかりました。

私自身は何とかなると思っていたのですが、子供の将来の教育費などを考えて、これまで我慢していた妻が、将来の不安をこぼすようになってきました。さらに、同僚の医師の中で、私がペシャワールに行くことに反対する人がいたために病院を辞めざるを得なくなりました。一時は活動を止めることも考えましたが、幸いサポートしていただけの病院が見つかり、現在も活動を続けることができています。

そして、中村医師とペシャワール会とで、今後このことを話しあって、経済的な安定のためにも、一年の内日本で半年働くことに決めました。苦勞はありましたが、現病院長のご理解もあり、ようやく経済的な不安もなくなりました。

さて、家族とともに現地に骨を埋めるぐらいの

確固たる意志を持った方がいれば喜ばしいことだと思いますが、そのような人の出現を待つのはあまり現実的ではありません。「己は貧しくとも、困っている人のために」というのは簡単なことです。一般的にいつて家族の理解を得るためには、経済的な不安をなくすことは不可欠です。

医師過剰時代の到来といわれています。しかし、能力のない医師であれば別ですが、医師としての実力を備え、患者さんのために一生懸命働けば、まだまだ理解してくれる病院は見つかるものと信じています。

さて、私は十月下旬より家族と共に現地に行く予定にしています。先日、中村医師に電話をしたところ、いつものように「現地は大変忙しくて混乱しており、スタッフの教育にまで手が回らない。一日でも早く来るように」と言われました。現地はまだまだ人を必要としています。我々と共に現地で働く人が一人でも多く増えることを期待します。

▼事務局ボランティア募集▼

*継続的に協力可能な事務局ボランティアを募集しています。①パソコンを扱える方 ②経理に明るい方 ③日常的な事務作業の手伝える方、事務局までご一報下さい。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済み切手は扱っておりません）

井戸掘りの助っ人としてやって来ました

風の学校 中屋伸一

今回、ペシャワール会がアフガニスタン東部にて開始した井戸掘り（枯れ井戸の追掘りを含む）プロジェクトに参加させていただくことになりました。

私は平成四年、それまで約十年続いていた会社員生活に終止符を打ち、千葉にある小さなNGO「風の学校」に受け入れられ、井戸掘りについて千葉で一年二ヶ月、フィリピンで八ヶ月の研修を終えました。

私には「いずれはアフリカで自分一人のプロジェクトを持ちたい。そのために、アフリカの人々の仕事の進め方や気質などを知りたい」と考えていましたので、「難民を助ける会」というNGOにお願いし、当時タンザニアで行われていた「ルワンダ難民救済プロジェクト」に参加させていただきました。

当地では「上総掘り」という千葉に伝わる、伝統的な手掘りの技術を使って、現地の人たちと働くことができ「人というものは、どんな国でも変わらないものだ」という、当たり前前のことを知ることができました。その後、友人がセネガルで行っていた井戸掘りプロジェクトを引き継

ぐことになり、電気・水道・ガスのない現地の小さな村に一人で居候をして、言葉を覚え、家族の一員としての生活を楽しみながら、馬車に乗って現場を回るといふ、のんびりとした生活を楽しみながら、活動を三回（実質二ヶ年）続けてきました。

そんな私も四十四歳、無職で独身、またオマンマが食べられるような特技も資格もない息子の行く末を案じる親の気持も思えば「まあ、このへんで自分の国際協力の活動も、ひとまず終りかな」と、最後になるであろうセネガル行きを準備を始めていた矢先、風の学校の事務局を通じて中村先生より電話をいただき「短期でもよいので」ということで、急速セネガル行きを取りやめ、今回の活動に参加させていただくことになりました。

電話をいただいたのが九月四日、十一日にペシャワールに入り、九月十九日現在、アフガニスタンのビザ待ちの状態です。現場の詳しい状況は分かりませんが、事故なく活動を報告する機会もあろうかと思えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

表紙をめぐる小さな物語 26
小さな旅

甲斐大策

ペシャワール市西方のアフガン難民地区を陽の出と共に出たマブウが、十五キロを歩いて旧市街に至ったのは昼近かった。泥屋に生れて十年、近くのバザールでんにくの粗皮剥きに過す日常を離れた、初めての遠出だった。

大工の祖父と父にはバキスタン側でも下請けの仕事があり、その中には、アフガニスタンの新興勢力の幹部が住む豪邸もあった。現場に横たわるバクタイアの松材をなでながら祖父は、呪詛をとなえるように呟いていた。

「この香りは、ここに住む奴のためのものじゃない。神がアフガニスタンに与えられた樹だ。アッラーフ……」

帰郷を考える祖父はある日、カーブルの飯は新しい歯で、と義歯を発注した。そして二日前、義歯完成の日、旧市街へ向うバスの停留所近くでトラックに接触し急逝した。

父は、祖父をカーブルへ、と望んだが、暑熱の中では一刻も早い埋葬が必要だったし、遺体搬送の金もなかった。

「パパには歯を入れてやろう。マブウ、受取りに行ってくれ。」

カーブル・ゲイト近くの義歯屋では、主人の食事の間、待てという。入口に腰かけたマブウの前に、コラア（帽子）売りの少年が立った。二年前まで同じ集落にいた一歳下のジャマルだった。握手を求め、一端の挨拶を口にする。

「サラーム、マブウ。お父さんは元気？ スプライトをどう？ おごるから……」

二人で一本のスプライトを飲み交わす。

「アジ・ハーンのつかいはあんたか？ 領収書を……」

背後に立っていた義歯屋は、マブウが示す領収書を一瞥すると、一組の義歯を入れたビニール袋を差出した。

アザンが流れる空を鷹が舞う。

幼い友人二人は再会を約し、大人びた抱擁を交わす。袋の中の義歯がかたりと音を立て、マブウを急ぎ立てた。

●事務局便り

*中央アジア全域が早魃の被害にある、というニュースがNHKから入ってきたのは、五月頃だったと思う。その時「会として動くか？」との問いに、「我々の会は医療チームなのでダイレクトな行動はとれないが、早魃による感染症の発生など医療問題が生じたら動くことになる」と答えた。この時点での実感はゼロに等しかった。

それから、七月の中村医師が帰国して、アフガンがこの三十年で最悪の早魃に襲われつつあるという報が入り、俄に慌ただしくなる。飲料水の不足による赤痢の発生や家畜の死亡、結果としての村人の棄村。何よりも村人の流民化を阻止するために、ドラエメール診療所周辺の村三〇ヶ所を井戸を掘ることを決め、現地に指示を出した。

もつと現地情報を知りたいものと、東京の某通信社外信部に電話を入れると、「そういう話は聞いていない、あのあたりはもとも乾燥地帯だから」という返事。ためにインターネットに当る日本語の「早魃」サイトでは一件。おかし。英文のサイトにあたる。すると、一五〇〇〇件がヒット。早魃は、アフガンだけでなく、インド・パ

キスタンからイラン・イラクに中央アジアまで、エチオピアの飢饉を超える今世紀最悪の規模になりつつあるという。そこで某通信社に、我々が翻訳した情報を送ると、漸く慌て始めた。「うーん、何がIT革命じゃ」

中村医師は、日本にいては落ち着かない「一体がかゆくなる」と急遽十日ほど現地に戻った。

そして、中村医師の現地からの報告で、水源確保のプロジェクトは一挙に拡大、一年計画で七〇〇ヶ所を目指すことになった。現在、一五〇を越える場所を着手、約六〇〇人のアフガン人が井戸掘り、カレーズの修理に従事している。

水源確保のための予算は約四千万円、すでに約二千万円が寄せられている。さらに皆さんの暖かいご支援を御願ひしたい。

〈お知らせとお願い〉

*ペシャワール会では現地ワーカーを募集しています。職種は、医師・看護婦など医療関係者と事務職。詳細は、会事務局までお尋ね下さい。
*今回の振込用紙より干ばつ寄金の専用欄を設けております。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

医は国境を越えて

中村哲 四六判上製三五〇頁 本体二〇〇〇円

アジア太平洋賞(特別賞)受賞! アフガン・パキスタンでハンセン病の根絶と山岳地帯での診療に挑つて十五年。宗教・民族・政治の軋轢と陰謀の地からニッポンに向けて放つ、苦闘のメッセージ

ドラエメールへの道

アフガン難民

中村哲 四六判上製三二六頁 本体二〇〇〇円

ペシャワールにて 頼りてアフガン難民

中村哲 四六判上製二六〇頁 本体一八〇〇円

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 本体一〇六八円

筑摩書房

東京都台東区蔵前一六四
電話 〇三(五六八七)二二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAHOUSE(〒八二〇〇一〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇